

貧窮——後アナキズム

前提条件と可能性

過去のあらゆる成功した革命は特殊利益を社会全体の利益として主張すべく努めてきた少数階級の自己主義的部分革命であつた。偉大な現代ブルジョア諸革命は政治的改造を一掃する（政治的改造の価値を認めない）というイデオロギーを提供した。しかし資本の経済的優越に公的政治的表現を与えることによって、現実には、それらは単にブルジョア階級の社会支配を保証しただけであつた。「国家」、「自由市民」、「法の前の平等」等の高尚な概念は中央集権社会、原子化し孤立した人間、ブルジョア利益の優勢等の浮世の現実を隠へいした。イデオロギー的主張を一掃（無価値化）したにもかかわらず、自己主義的部分革命は一階級の支配を他の階級で、搾取の体系を他のシステムで、苦しい労働の一システムを他のシステムで、心理的抑圧の一システムを他のシステムで置換した。

我々の時代にユニークなことは、自己主義的部分革命が今や全体革命——完全な、総体的な革命——の可能性に包摂されている、ということである。ブルジョア社会は、他のことは何も達成しなかつたとしても、歴史上先例のない規模で生産手段を革命化した。サイバネで絶頂に達したこの工業技術革命は、階級支配、搾取、労苦、または物質的欠乏等のない世界のための客観的、量的基礎をつくつてゐる。訓練が權威主義的な様式の労働や有罪性等から解放された、そして欲望と神秘的なものの感覺的不安を切り捨てた、多面的で円熟した人間、総体的人間の發展のための手段が今や存在する。思想と活動の、精神と感覺の、規律と自発性の、個性性と共同体の、人間と自然の、都市と農村の、教育と生活の、労働と遊戲の分岐がすべて解決され、調和され、有機的に結合され自由の王国に至るところの密着化プロセスによって人間の未来の経験を考えることは、今や可能である。自己主義的部分革命が自己主義的部分的な、分岐した社会をつくつたのとまさに同様に、全体革命は有機的に統一された、

多面的な共同体をつくることができる。「社会問題」の形で所有社会によって切開された大きな傷は、今や癒されることのできる。

自由は動物的表現ではなく、人間的表現で——生存の立場によってではなく、生活の立場によって——考えられねばならない、ということとは十分に明白である。人は単に社会の支配を脱したり、抽象的な形で自由を獲得したりすることによって、奴隷の身の束縛を解放しないし、完全に人間的になることはない。人は具体的にまた自由でなければならぬ。物質的欠乏から、苦しい労働から、時間のより多くの部分——実際は、生活のより多くの部分——を貧困と闘うために割かねばならない重荷から自由でなければならぬ。人間的自由のためのこれらの物質的前提条件を見れば、自由は、社会的特権としての自由時間を廃止するために、自由時間と物質的豊富を必要条件とする、ということとは、現代の革命理論へのカール・マルクスの偉大な貢献である。

それでは、自由の前提条件は自由の条件と間違えられるべきではない。解放の可能性は解放の現実性を構成するものではない。工業技術の発展はその肯定的な諸点と共に、明確に否定的な、社会的に退行的な側面をもっている。もし工業技術が自由のための歴史的潜在力を増大する、ということが真実ならば、工業技術のブルジョアのコントロールは社会の現組織と毎日の生活を補強する、ということもまた真実である。工業技術と豊富な富は資本主義に社会の大部分を階級制と権威の現体制に同化させるための手段を提供する。それらは大衆抑圧の現実には勿論のこと、威嚇のための武器や探査装置や宣伝メディアを体制に提供する。その中央集権的性質によって、豊富な富は政治的装置に独占的な、中央集権的な、官僚的な傾向を

補強する。要するに、それらは国家に生活の丸ごとの環境を操作し、運用するための——そして階級制、搾取、非自由等を永続化するための——歴史的に先例のない手段を供給する。

しかしこの環境の操作と運用は極めて疑わしいし、危機の重荷を負っている、ということが強調されねばならない。和解（ここではまだ調和ということについては決して話せない）へ導くことは違つて、社会は勿論、環境、自然をコントロールし、開発しようとするブルジョア社会の試みは荒廢的な結果をもたらす。諸書物が大気と河川の汚染、森林や土壌の破壊、食料品や飲料物の有毒物質について書かれている。終局においてより脅威でさえあることは、人間のような複雑な生物に要求されるまさに生態の破壊と汚染である。放射性廃物の生物への蓄積は近い将来すべての種の健康と遺伝物質にとつて脅威である。プランクトンの酸素生産を阻害するところの殺虫剤による、あるいはガソリンから生ずる有毒に近い水準の排気物による世界的規模の汚染は、すべての高等生物——人間も含む——の生物学の完全無欠性を脅かしているところの現に起っている汚染の例である。

何が環境汚染物を構成するかについての我々の伝統的な概念を大胆に転換しなければならぬ、という事実ほど警告的なものはない。数十年前には、用語の慣習的な意味で、炭酸ガスや熱を汚染物として述べることは馬鹿げたことであつたろう。今や両者は将来の生態的不均衡の最も深刻な諸源の間に十分ランクされ得るし、地球の生存能力に重大な脅威を与え得る。工業的、家庭的燃焼活動の結果として、大気中の炭酸ガスの量は過去一〇〇年間に約二五パーセント増加したし、今世紀の終りには、その倍になるかも知れない。

増大する量のガスがつくると予想された有名な「グリーンハウス効果」は諸メディアで広く議論されてきた。終には、ガスは、世界の熱が空間に消失することを阻止するだろうし、極の水冠を溶かし、その結果、膨大な海岸地域の浸水をもたらすだろう全体的温度を上昇させるだろう、ということが支持されている。主に核力の工場、旧来の力による工場から放出される温水の結果である熱汚染は、湖、川、河口等の生態に悲惨な効果を与えている。水温の上昇は魚の生理的、生殖的活動に打撃を与えるのみならず、水路においてかくまで恐ろしい問題となっている藻類の大繁殖を促進する。

生態的に言えば、環境のブルジョアの開発と操作は高等生物を維持する地球のまさに能力を衰えさせつつある。危機は、空気と水の汚染が多量に増加することによって、揚められつつある。分解焼却できない廃品の山のような堆積によって、食品の鉛残留、殺虫剤の残留、有毒添加物によって、膨大な都市帯への市の拡張によって、人口過密、騒音、集団生活のために生ずる増大するストレスによって、そして採掘作業、材木の伐採、真の土地投機の結果としての地球の無茶な傷跡によつてもまた揚められつつある。結果的には、地球は地球上での人間居住の全歴史で先例のない規模で数十年間略奪されている。

社会的に言えば、ブルジョアの開発と操作は毎日の生活を空虚と退屈という最も苦しい点に運び込んだ。社会が工場と市場に変えられた時、生活のまさに理論的根拠が生産のための生産——そして消費のための消費——に帰せしめられた。^(注)

(注)「消費社会」の出現はマルクスの時代の産業資本主義と国家

資本主義の相連の著しい証明を我々に提供する、ということとはここでは何の価値もない。マルクスの観点では、「生産のための生産」の周囲に組織された体制としての資本主義はプロレタリアートの経済的貧困化を起す。「生産のための生産」は、貧困化が経済的な形よりも精神的な形をとる——それは生活の飢餓状態であるが——ところの「消費のための消費」と今日並列している。

救済的弁証法

人々が毎日の生活の十分なコントロールに達するアナキックな社会の方向への社会の発展を導くことのできる救済的弁証法があるか。それとも、社会弁証法は資本主義と共に、抑圧的目的や選挙的目的のために高度に発展した工業技術を使用することによって封印されたその可能性とともに終るのか。

我々はマルクス主義の限界から、物質的貧窮の時期には理解できるのだが、社会弁証法と経済的領域での資本主義の矛盾に投錨したプロジェクトからここで学ばねばならない。マルクスは、強調されてきたことだが、自由の条件ではなく、自由の前提条件を調べた。マルクスの批判は過去つまり、物質的欠乏とかなり限定された工業技術の発展の時代に根ざしている。そのヒューマニスティックな疎外の理論でさえも、主に労働の問題と労働の生産物からの人間疎外に向けられていた。しかし今日、資本主義は未来を食って生きる寄生動物であり、工業技術と自由の諸源を吸って残存する吸血鬼である。マルクスの時代の産業資本主義は、物質的貧窮が優勢な体制の周囲に商品関係を組織した。我々の時代の国家資本主義は、物質的

豊富さが優勢な体制の周囲に商品関係を組織している。一世紀前、貧窮は耐えられねばならなかった。今日、それは強制されねばならぬ（貧窮とは言えないのに、貧窮だと思わせられる）——それ故、ここに現代の国家の重要さがある。現代の資本主義はその矛盾を解決し、社会弁証法を解消しているのではなく、むしろ社会弁証法と資本主義の矛盾は、社会の経済的領域から位階制的領域へ、抽象的「歴史的」領域から日々の経験の具体的細目へ、生存の活舞台から生活の活舞台へ拡張された。

（注）資本主義の経済的矛盾は消滅してはいない。しかしシステムは過去にそうであった爆発的性格をもはやもたないような程度にまでは計画され得る。

ブルジョア的國家資本主義の弁証法は、商品社会の抑圧的性格と工業技術の発展によって開かれた巨大な潜在的自由との間の矛盾に起源をもつ。この矛盾はまた社会の搾取的組織を自然世界——自然環境のみならず、人間の「自然」——エロスに引き出された人間の衝動——に対立させる。社会の搾取的組織と自然環境の間の矛盾は選挙で解決されない。人間の残存に要求される大気、河川、土壤、そして生態は戦術的政治の再編、譲歩あるいは修正によっては救済されない。地球上の生命を維持するのに十分な量の酸素を生産することのできるいかなる工業もない。地球の陸水学的体系のいかなる代用品もない。放射性同位元素、殺虫剤、鉛及び石油の廃物による大量の環境汚染を除去するいかなる技術もない。ブルジョア社会が死活にかかわる生態のプロセスの崩壊において、自然資源の開発

まった。これらの位階制形態がかつて用語のマルクスの意味で「前進的」であつたかどうかは、問題ではない。それはラオウル・ヴァネイゲンが次のごと述べたことである、「位階制の力は、アルコールが成長も腐敗も阻止することによって胎児を保存するように、何千年もの間人類を保護してきた、と言うだけでは十分ではない。」（『子やぎのための全体性』）今日これらの形態は、人が今人類のまきに生存を脅かしている核によるカタストロフ、または生態的破壊をその結果として見ようが見まいが、現代資本主義によって生れたあらゆる革命的力の標的を構成している。

人類のまきに存在への脅威にまで至る位階制形態の発展とともに社会弁証法は、廃棄されるのではなく、一つの新しい次元を獲得する。それは全く新しい方法で「社会問題」を押し出す。もしマルクスが強調したように、人間が生活するために生存の条件を獲得しなければならなかったならば、今や人間は生存するために生活の条件を獲得すべきである。生存と生活の間の関係のこの逆転によって、革命は新たな意味での急迫性を得る。我々はもはや社会主義が野蠻状態かの有名なマルクスの選択に直面しているのではない。我々はアナキズムか絶滅かの一層激烈な二者択一に直面している。必要と生存の問題は自由と生活の問題と一致するようになった。それらは存在するものと可能なもののギャップに橋渡しするいかなる理論的調停、「過渡」期、中央集権組織も必要としない。事実、可能なものは存在し得るすべてのものである。それ故、一世紀近くの間マルクス主義者をとらえてきた「過渡」の問題は工業技術の発展によってのみならず、社会弁証法それ自身によって消滅させられる。社会再建の問題は社会の自己解放活動によって自然に解決される実際

において、廃物の捨て場所としての大気や河川の使用において、あるいは都市化と土地の濫用のガンの様式において、予見できる未来のいくつかの箇所を加えるだろう、という最も微弱な証拠さえもない。

社会の搾取的組織と人間のエロスに引き出された衝動との間の矛盾——官僚的に操作された、非個性的な大衆社会において、経験の陳腐化や貧困化として自己宣言する矛盾——は直接的でさえもある。人間におけるエロスに引き出された衝動は抑制され昇華される。しかしその衝動は決して排棄され得ない。その衝動は人類のあらゆる誕生とともに、青年のあらゆる世代とともに更新される。何らかの経済的階級、または階層を超える青年が、人間の本性における生活の衝動——欲望、官能、神秘的なものの魅惑等に強くかたてられ、このことを明確に表明している、ということとは今日驚ろくべきことではない。このように、位階制社会が昔そこから生じた生物学的母組現下はこの母組織が社会現象で飽和させられている。人間の胚原形質を処理することは問題外として、生活——衝動は人間自身の絶滅と伴いのみ廃棄され得る（つまり人間の絶滅が起るまでは生活——衝動は決して廃棄され得ない）。

官僚的國家資本主義内部の矛盾はブルジョア社会によって発展させられた、過度に発展させられたあらゆる位階制形態に浸透する。長年間所有社会を育て、その発展——国家、都市、寡占経済、官僚制、家父長制家族、市場等——を推進した位階制形態はその歴史的限界に達してしまつた。それらは固定的様式で社会的機能を使い尽してし

的仕事に還元されてしまつた。

事実、革命は新しい意味の急迫性のみならず、新しい意味の約束を獲得する。ヒッピーの種族生活、何百万人もの青年のドロップ・アウトの生活様式やフリーセックス、アナキストの自発的親和グループ等において、我々は否認の活動の後にくる是認の形態を見る。「社会問題」の逆転と伴に、社会弁証法の逆転もまた起る。「肯定」は自動的に同時に「否定」と伴に出現する。

解決は離脱点を得て問題を無価値化する。時代は国家、都市、官僚制、寡占経済、家父長制家族、市場等がその歴史的限界に到達した歴史に入つた時、提出されるものはもはや形態の変化ではなく、かような位階制形態のすべての完全な否定である。国家の完全な否定はアナキズム——人が「歴史」のみならず日々の生活のあらゆる直接的環境さえも解放する状況——である。都市の完全な否定は共同体——社会環境が多面的な、生態的に平衡のとれたコミュニティに分散されている共同体——である。官僚制の完全な否定は媒介された関係とは区別された直接的なもの——代表制が自由な個人の一般的集会における顔と顔の関係によって置換される状況——である。寡占経済の完全な否定は地域的生態工業技術——生産手段が生産系に適合するように形づくられる状況——である。家父長制家族の完全な否定は解放された性——そこでは性的規制のあらゆる形態は平等の者の間の自然な、束縛されないエロティシズムの表現によって超えられる——である。市場の完全な否定は共産主義——そこでは集産的豊富さと協同が労働を遊戯に、必要を欲望に変移させる——である。

自発性とユートピア

位階制的権力と操作がその最も脅威的均衡に到達した歴史的時点、で位階制、権力、操作等のまさにその概念が疑問にふされつつある、ということとは偶然ではない。これらの概念への挑戦は自発性の重要さの発見・生態、自己発展という高められた概念、社会における革命的プロセスの新しい理解等によって養われた再発見から出てくる。

生態学が示してきたものは、自然における均衡が均質性や単純化によってではなく、有機的多様性と複雑性によって達成される、ということである。例えば、生態系の植物相と動物相がより多く多様であればあるほど、潜在的害虫の人口はそれだけ増々固定する。環境の雑多性が減少すればするほど、潜在的害虫の人口は増々大きく変動し、コントロールを脱する可能性さえ持つだろう。放置すれば、生態系は有機的分化、植物相と動物相のより大きな多様性、被食者と捕食者の数の雑多等に自然と向う傾向がある。このことは、人間による干渉が避けられるべきだ、ということの意味しない。生産的農業―それ自身自然との干渉の一形態である―の必要は食料耕作と森林管理への生態的アプローチの最前面に常にどまらねばならない。人が生態的質を膨大に増進するだろう生態系における変化をし、ばしばしばつくり出せる、という事実程重要なことはない。しかしこれらの努力は野蛮な力と操作の發揮ではなく、洞察と理解を必要とする。

この管理の概念、つまりこの自然性の重要さへの新しい配慮は工

的工業技術にむけて』を参照されたい。

共同体のための小規模な農業と工業の含意は明らかである。もし人間が生態系を管理するために必要とされる原理を用いるべきならば、社会生活の基本共同体単位はそれ自身生態系―生態共同体―にならねばならない。それはまた多様化した、均衡のとれた、均整のとれた豊かなものにならなければならない。共同体のこの概念は、決して、人間と自然世界の間の永続的均衡の必要によってのみ動機づけられているのではない。それはまた均整のとれた豊かな人間のユートピア的観念、つまりその感受性、経験の幅と生活様式が広範囲の刺激によって、活動の多様性によって、一人の人間の理解内に常にとどまる社会規模によって育てられる個人と一致する。このように生存の手段と条件は生活の手段と条件になる。必要は欲望に、欲望は必要になる。もともと偉大な社会的解体が最高度の社会的統合の源を提供し、最緊急の生態的必要性が最高度のユートピア的諸観念と伴に共通の焦点となることの時点が到達される。

ガイ・デボートが述べたように、「日々の生活があらゆることの尺度―人間関係の完全な実現、あるいはむしろ非実現の尺度、我々の時代にできる風習の尺度―である」ということが真実ならば、一つの疑問が起る。その日々の生活が完全に実現されるべき「我々」とは誰か。時間を生活に、空間を共同体に、人間関係を驚嘆すべきものに転ずることのできる解放された自己はどのようにして出現するのか。

自己の解放は何にもまして社会的プロセスを包含する。自己を縮ませ、商品―交換のために生産された物質―に押し込めてしまった

業技術と共同体―さらに、解放された社会での人間の社会的イメージのための広範囲の適用である。それは工場操作、広大に組織され、中央にコントロールされる土地所有、高度に特殊化した単式農業の形態、土地の工場用地へのための減少、有機的プロセスへの化学の代用、隊団労働の使用等々としての農業の資本主義的観念への挑戦する。もし食料耕作が対立者の間の抗争であるよりもむしろ自然との協同の一様式であるべきならば、農業者は土地の生態に完全に親しむようにならなければならない。農業者は土地の必要物と可能性への新しい感受性を獲得しなければならぬ。このことは農業の人間の規模への還元、適度な大きさの農業単位への復帰、農業状態の多様化等を予想する。要するに、それは分散された、生態的な食料耕作のシステムを予想する。

同じ根拠は汚染のコントロールに適用される。巨大な工場複合体の発展と単式及び複式エネルギー資源の使用が大気汚染の原因である。より小さな工業単位を發展させることや清浄な力（太陽、風、水等の力）の大規模な使用によるエネルギー資源の多様化によってのみ、工業汚染を減少することが可能となるだろう。このラジカルな工業技術の変化のための手段は今手近にある。工業技術者は大規模工業操作に対する縮小された代替物―小さな可転性機械類や太陽風、水のエネルギー―を工業や家庭で使用可能な力に換えるための技巧の凝った方式―を發展させている。これらの代替物は今日存在する大規模な設備よりもしばしばより生産的であり、より少なく不経済である。

(注) この「縮小された」工業技術の細部の議論のためには「解放

社会では、いかなる完成された自己もあり得ない。唯、利己の始まり、つまり完全を追求する自己―実現化を達成するために克服されねばならない障害物によって大部分限定された自己―の出現のみがある。その腹が革命による破裂点に達するまで膨張し、その慢病状態が果てしない労苦の連続であり、その現実の状態が高まった非常事態である社会では、唯一の思想と行動のみが適切である―産むこと。個人的であれ社会的であれ、この事実を人間経験の中心としないいかなる環境も、ブルジョア社会での毎日の生活の我々の日々の毒を我々が吸収してしまつた後、たとえ自己が我々に何を残そうともいせ物であり、縮小する。

今日革命の目標は日々の生活の解放であらねばならない、ということとは明らかなことである。この目標の実現に失敗するいかなる革命も反革命である。何にもまして、解放されねばならないのは我々であり、「歴史」や「社会」のような普遍的なものではなく、あらゆる瞬間、時間、日を含めた我々の日々の生活である。^(注) 自己は革命によってくじけさせられるのではなく、革命の中でも常に同一である、と証明されるものでなければならぬ。自己は革命によって沈没させられるのではなく、革命のプロセスの中でも常に認知できるものでなければならぬ。「革命的」語いの中で、「大衆」よりもより悪意のある言語はない。革命的解放はエリート支配、位階制国家等がその後に潜んでいる「大衆解放」、あるいは「階級解放」ではなく、社会的次元に到達する自己解放でなければならぬ。もし革命が革命家の自己活動、自己動員によって新しい社会をつくり出すのに失敗するならば、革命が革命のプロセスの中で自己の發揮を包含しないならば、革命は、その生活が毎日生きられるべき人

人、その生活が日々の生活を不変のままにとどめておく人々を今再び策略で陥し入れるだろう。革命からは、自己の十分な所有を今再び得る日々の生活ではなくて、日々の生活の十分な所有を得る自己が出現しなければならぬ。最前進した階級意識の形態は、このように自己意識——偉大な解放されつつある普遍の日々の生活における集中——となる。

(注) 社会弁証法への口先だけの忠誠ではなく、伝統的左翼は今もヘーゲルの「具体的普遍」を大事に抱えねばならない、「具体的普遍」を単なる哲学的概念としてだけではなく、社会的プログラムとして見なければならぬ。これはマルクスの初期の著作、偉大なユートピアン（フリーエカウイラム・モリス）の著作、そして我がの時代ではドロップアウトした青年、等によってのみ行なわれてきた。

たとえこの理由だけでも、革命運動は生活様式に深刻にかかわっている。それは革命に関与するのみならず、革命のあらゆる全体性において革命を生きたことを試みねばならない。それは革命家が生活する方法、彼の周囲の環境との関係、彼の自己解放の程度と深くかかわっている。社会を変革する追求において、革命家は彼自身の存在の再征服を要求する彼自身における変革を避けることはできない。彼が参加する運動と同じく、革命家は、彼が達成しようと少なくともこれが今日可能である程度までは試みている社会の諸条件を反映すべく努めなければならない。

過去半世紀の裏切りと失敗は革命目標からの革命プロセスのいか

命の初期の日々を、そして一九六八年のバリでの五月—六月の事変等を印づけている。我々の時代の歴史で起るほとんどあらゆる革命は「大衆」——しばしば革命組織によって進められた、ためらいがちな、へつばり腰の政治の平板な反抗の中にある——の自己活動によって自発的に開始されてきた。これらの革命のどの一つをとってあげても、極度の個別化と毎日の生活を祭に転換した楽しみと連帯によって印づけられている。深層のリビドー的力の爆発を伴う革命プロセスのこの超現実的次元は、ちらちら光る水（＝酒）面の好色家の顔のように歴史のページを通して怒りっぽく歯をむいている。ボルシェヴィキの政治委員が一九一七年十一月の夜、冬宮で酒樽を打ち壊した、ということとは理由のないことではない。

伝統的左翼の清教徒主義と労働倫理は今日革命に對抗する最大の強力の一つ——革命的組織構造に浸透するブルジョア的環境の力能——から出てくる。この力の起源は資本主義下の人間の商品的性質、ほとんど自動的に組織されたグループに移行する質——そして今度は、そのグループがグループのメンバーにそれを強制する——に横たわっている。以前にジョセフ・ウェバーが強調したように、あらゆる組織されたグループは「自主的に自身を明渡す（＝放棄する）、つまり元来の目的から自身を疎外し、自身を支配するものの手の中で果てる傾向がある。」（『偉大なユートピア』）この現象は国家や半国家の諸制度、公党や労働組合で真実であるのと同じく、革命組織でも真実である。

疎外の問題は革命プロセスそれ自身から離れては決して完全には解決され得ない。しかしそれは問題が存在するという鋭い感知によって警戒され得るし、部分的には、革命家と彼のグループの自発

なる、分離もあつてはならない、ということこそを自明の理としてきた。基本的目的が生活のあらゆる面における自己管理である社会は、自己活動によってのみ達成され得る。これは常に自己によって所有される管理の様式を意味している。人を支配する人の力は、人が自身の生活を支配する力を獲得し、人が自身を「発見」するのみならず、より意味深い事は彼の個性性をあらゆる社会的次元において公式化するそのまさにプロセスによってのみ破壊され得る。

リバーリアンの社会はリバーリアンの革命によってのみ実現され得る。自由は「革命」の「最終産物」として個人に「引き渡される（＝自由にされる）」ことはできない。集会や共同体は法律で制定されたり、布告されたりして存在することはできない。革命的グループはこれらの諸形態の創造を推進することを目的に、意識的に追求することはできる。しかしもし集会や共同体が有機的に出現することを許されないならば、もしそれらの成長が非大衆化（＝個別化）、自己活動、自己実現等によって育てられないならば、それらは革命後ロシアのソビエトのような形態以外の何ものも残さないだろう。集会や共同体は革命のプロセスの内部で生じなければならない。実際、革命のプロセスは集会や共同体の形成であらねばならないし、権力、所有、位階制、搾取等の破壊であらねばならない。

自己活動としての革命は我々の時代にユニークなものではない。それは現代歴史におけるあらゆる偉大な革命の至上の特徴である。それは一九二二年と一九三三年のサン・キユロットの日々を、ベトログラードでの一九一七年二月の有名な「五日間」を、一九三六年のバルセロナのプロレタリアの蜂起を、一九六五年のハンガリア革

命的な、しかしドラステイックな改造によって解決され得る。この改造は、革命グループが「前衛」ではなくて革命のプロセスにおける触媒である、と認識する時にのみ始まり得る。革命的グループは、その目標が権力を握ることではなく、権力の破壊である、ということとを明確に見なければならぬ——さらに、それは、権力の問題、下からのコントロールや上からのコントロールの丸ごとの問題が只いかなる上下もないならば、その時にのみ解決され得る、ということを見なければならぬ。

何にもまして、革命的グループは権力の形態——法令、位階制、所有、指示された意見、物神、身のまわりの品々、公的エチケット等々——及び権威や位階制を意識的、無意識的に強化する官僚的、ブルジョア的特徴のものとも明らかに異なるものは勿論、もともとかすかなものの形態からも離れていなければならない。そのグループは公式化された決定のみならず、そのまさに公式化プロセスにおいてもまた、公衆のせんざくに開かれたままでいなければならない。理論が実践であり、実践が理論である、ということが深い意味で一貫していなければならない。それは日々の存在においてあらゆる商品関係を離れ、それが達成しようと追求しているそのまさに社会の地方分権的組織原理——共同体、集会、自発性——に沿って自己を構成しなければならない。それにジョセフ・ウェバーのこの上なくつばな言葉では、「単純さと明確さによって常に特徴づけられ、常に、準備なしの何千もの人々がそこに入り、それを管理することができ、常にそれはすべての人々に透明であり、すべての人々によってコントロールされ」ねばならない。（『偉大なユートピア』）革命運動が、達成しようとしている地方分権的共同体と合致しているとき、

その時にのみ、それは社会発展に対する他のエリート主義的障害物になることを避け得るし、外科の糸が癒されつつある傷になるように溶解して革命になり得る。

展望

今日アメリカで進行している最重要なプロセスはブルジョア社会構造の大々的な制度破壊である。本質的な、射程の長い不敬と深刻な不忠は現秩序の価値、形態、大望、そしてなにかんなく制度に向けて広がっている。アメリカの歴史で先例のない規模で、何百万の人々が彼等の生きている社会への拘束を捨てつつある。彼等もはやその主張を信用していない。彼等もはやそのシンボルを尊敬していない。彼等はもはやその目標を受け入れないし、最もとも意義深いことは、彼等はその制度的、社会的慣例によって生きることをはほとんど直観的に拒否している。

この募る拒否は非常に深くなる。それは戦争への反対からあらゆる形態における政治的操作にまで達する。人種主義の拒絶から始まって、それはそのような階層的権力のそのまに存在を疑問に付している。中産階級の価値や生活様式を憎悪すること、それは商品システムの拒絶へ急速に揚まっている。環境汚染のいらいだちから、それはアメリカの都市と現代都市生活の拒絶になる。要するにそれは社会のあらゆる特殊な批判を超え、常に広がる規模でブルジョア秩序への反対に揚まる傾向がある。

この点では、我々の生きる時期は十八世紀にフランスを総なめにした革命的啓蒙、フランス人の意識を完全に再加工し、一七八九年

向う漸増的發展において他者を超えるのみならず、他者を前提とする、ということをや我々は見てとることができる。

同じ不均齊な、矛盾的、漸増的發展は今日存在する。そして多くの場合、それは著しい直線コースを辿っている。「ビート」運動は一九五〇年代の強固な中間階級の価値に最重要な突破口をつくった。この突破口は平和主義者、市民権運動家、徴兵反対者、長髪族等の不法行為によって恐ろしく拡大された。さらに、反抗的アメリカ青年の単なる反発的応答はリバータリアンの、ユートピアの確認——制限なしの恋愛の権利、共同体の目標、金や商品の拒否、相互扶助の信念、自発性の新しい観念等々の非常に貴重な形態をつくり出してきた。革命家が個人的、社会的価値のこの位置づけ内部で或る落し穴を批判することは容易であるけれども、それは無規律、自発性、ラジカリズム、自由等の現存する雰囲気形成する上で決定的重要な準備的役割を果たしてきた、という事実は残る。

革命的啓蒙と我々自身の時期の間の第二の並行は社会的抗議の重大な媒介物としての群衆、いわゆる「暴徒」の出現である。公的不満足の典型的制度的形態——我々の時代では、それらは秩序正しい選挙、デモ、大衆集会である——は群衆による直接行動に道を譲る傾向がある。現存する社会の制度化された機構内部での予断可能な、高度に組織された抗議から、外部的な、社会的に受け入れられる形態からの散在的、自発的、暴動に近い攻撃へのこの変遷は大衆の心理における深刻な変化を反映している。「暴動者」は伝統的に「大衆」を現秩序に接合させる行動のこれらの沈潜した規準を、部分的に直観的にではあるが、破り始めてきた。「暴動者」は、権威の中央集権的構造、条件反射で長期間養われた身体、人を警察の暴行の恐

の偉大な革命の条件を準備した時期——に極めてよく似ている。当時も今と同じく、古い制度は、それらが大衆の革命行動によって倒されるずっと以前に、下からの分子的活動によってゆっくりと碎かれた。この分子的運動は総体的な無法の雰囲気をつくる。募る個人的な日々の不従順、存在するシステムに沿って「進んで行か」ない傾向、見たところ「さ細」であるが、それにもかかわらず毎日の生活のあらゆる面での制限を出しぬく批判的試み等々の雰囲気をつくる。事実上、社会は無秩序に、無規律に、ディオニソス的に——いや増す程度の公的危機においても——ともドラマティックに現われる状態になる。システムの龐大な批判——二世紀前には現実的啓蒙、それ自身そして今日存在する社会全体の総なめの批判——は発展する。この批判は下方に浸み込み、基底での分子的運動を促進させる。それが怒ったジェスチャーであろうと、「暴徒」または生活様式における意識的変化であろうと、増え続ける数の人々——この人々は社会それ自身に束縛されないのと同様に、組織的革命的運動にも束縛されない——が彼等自身の行動の反抗的プロパガンダに自発的に従事し始める。

その具体的細部においては、分解する社会的プロセスは多くの源によって養われる。そのプロセスはあらゆる革命的情勢を印づけるあらゆる不均齊、あらゆる矛盾とともに発展する。十八世紀フランスでは、ラジカルなイデオロギーは硬直した科学主義とどろくしたロマンティズムの間を動揺していた。自由の観念は実践的論理的自己コントロールの考えと、また漠然とした直観的な自発性の規準に鍾を垂れていた。ルソーはドルバックとデイドローはボルテールと各々半分づつを分担していた。今回顧してみて、人は革命へ

れや法律の報復の恐れのかかるものよりも一層効果的にさえシステムに縛りつけるキリスト教的罪性によって支持された服従の型等を積極的に破壊する。直接行動のこれらの様式に「暴徒」と呼ばれる恐ろしい集合的実在への個人の服従を見て取る社会心理学者の観点とは対照的に、「暴動」や群衆行動は個体化へ向う大衆の最初の手探りを表わしている、ということが真実である。大衆はブルジョア的家庭や学校やマス・メディアによってつくり出された真にマスカ化する自動的（機械的）応答に反対して自身を主張する、という意見では非マスカ化されるようになる傾向がある。それで思えば、群衆活動は街路の再発見を意味し、街路を解放する努力を意味する。結局、権力が分解されねばならないのは街路においてである。なぜなら、日々の生活が忍耐され、苦しめられ、触れられる街路が毎日の生活が楽しまれ、創造され、育てられる場に変えられねばならないから。反逆的群衆は社会的反抗への個人の自然的変形のみならず、社会的反抗の抽象性から毎日の生活の問題への召還の開始を示した。最後に、啓蒙の時代におけると同じく、我々は莫大な、常に成長する落伍者（*declassés*）の階層、つまりあらゆる社会階層から引き出されたルンペン化した個人の集団の出現を見ている。慢性的に負債が有り、社会的に不安な我々の時代の中間階級は、慢性的に破産した、上調子の革命前のフランスの貴族とかなりよく比肩する。教育のある人々の龐大な浮き荷がその当時、今と同じく出現し、固定した職業または現社会への根を持たずにだらしのない目的で生きていた。両構造の底に、我々は非常に多くの貧窮者——浮浪民、放浪者、時間仕事か全く仕事のない人々、恐ろしく手に負えない、社会救済や社会で投げすてられた残飯で生き残っているサン・キュロット、

つまりパリのスラムの人々、アメリカのゲットウの黒人等々を発見する。

しかしここであらゆる並行は終る。フランスの啓蒙期は封建主義から資本主義への革命的過渡の時期に属する——この両社会は経済的貧窮、階級支配、搾取、社会的位階制、国家権力等に基づいている。十八世紀を特徴づけた、そして開かれた革命において絶頂に達したところの日々の繰返す人々の反抗は新たに出現した産業秩序によって——むき出しの武力によっては勿論——すぐに規制された。落伍者やサン＝キュロットの膨大な大衆は工場システムに大部分吸収され、産業規律に馴らされた。以前には根なしの知識人や流浪の貴族は新しいブルジョア秩序の経済的、政治的、社会的、文化的位階制内に安全な場所を見出した。社会的に文化的に流動的な状態から、その構造と関係において高度に一般化された社会が硬直した特殊化した階級と制度的形態に固められた——古典的なヴィクトリア時代がイギリスにおいてのみならず、程度の差こそあれ西ヨーロッパのすべてとアメリカに現われた。批判は弁解に、反逆は改良に、落伍者は明確に定義された階級に、そして「暴徒」は政治の選挙区有権者に整理された。「暴動」は、我々が「デモ」と呼ぶ行儀正しく振舞われる行進になり、自発的直接行動は選挙的儀式に変わった。

我々自身の時代はまた過渡的なものである。しかし深刻な新しい相違を持ったものである。彼等の偉大な暴動の最期において、フランス革命のサン＝キュロットは炎の叫びのもとに蜂起した——「パンと一七九三年の憲法を！」アメリカのゲットウの黒人サン＝キュロットは次のスローガンのもとに蜂起した——「黒人は美しい！」これら二つのスローガンの間には先例のない重要な発展が横たわる。十

八世紀の落伍者は農業から産業時代へのゆっくりした過渡期の間に形成された。彼等は労苦の一つの体制から他のもう一つの体制への歴史的過渡期における一休止からつくられた。パンの要求は所有社会の発展におけるいかなる時でも聞かれることができた。二〇世紀の新しい落伍者は労苦に基づいたあらゆる社会的形態の破たんの結果としてつくられた。彼等は所有社会それ自身のプロセスの最終産物、つまり物質的生存という社会問題の最終産物である。工業技術の発展とサイバネがたといかなる形態のものであろうとも、人による人の搾取、労苦、物質的欠乏等を疑問に付した時代においては、「黒人は美しい！」または「戦争ではなく恋愛を！」は生存のための伝統的要求が生活のための歴史的に新しい要求へ変移したということの特徴としている。今日合衆国で社会的闘争の土台を堅めるものは十分に完成された、均衡のとれた、全体的な生活の方法におけるあらゆる人間的潜在力の現実化のための要求である。要するに、アメリカでの革命のための潜在力は今や人間自身の潜在力に垂を垂れている。

(注) 上述の諸行は一九六六年に書かれた。その時以後、我々は五月—六月の革命の間、パリの壁に落書きを見てきた——「想像力があらゆる権力をとる」、「欲望の現実性を信じるが故に欲望を現実と考える」、「働くな」、「恋すれば恋する程革命を欲す」、「死んだ時間のない生活」、「消費すればする程生活は貧弱になる」、「文化は生活の転倒だ」、「人は幸福を買うのではない、それを盗むのだ」、「社会は肉食の花だ」。これらは落書きではない。これらは生活と欲望のためのプログラムである。

我々がまのあたりに見ているものは、最も大胆なユートピアの概念が現実化される歴史上の一点での、一世紀半におよぶブルジョア期の崩壊、あらゆるブルジョアの制度の粉砕である。現在のブルジョア秩序がその伝統的制度的破壊に代替できるものは、官僚的操作と国家資本主義以外には何もない。このプロセスは合衆国で最もドラマティックに展開しつつある。ほぼ二〇年間、我々は「アメリカの夢」の崩壊、同じ事になるが、人間の間の商品関係に基づいた物質的豊富さがブルジョア生活固有の貧困を隠すことができる、という神話の合衆国における確実な破壊を見てきた。このプロセスが絶頂に達して革命にいたるか、破滅にいたるかどうかは、社会意識を伸張し、「左翼」と右翼の両方の権威的イデオロギーから革命的発展の自発性を防禦する革命家の能力に大部分依存するだろう。

ニユーヨーク

一九六七年十月—一九六八年十二月